

# 日本テコンドー協会試合法

## 蹴美強化法一非蹴美的蹴り技の禁止 J T A全公式戦における中段回し蹴り禁止 および下段回し蹴り失格の徹底

2013年7月20日  
日本テコンドー協会  
宗師範 河 明生

日本テコンドー協会（J T A）が普及する日本跆拳道の技術的目標は蹴美を高めることにある。ところが、近年、フルコンタクト系空手等の他の打撃系武道経験者の入門が増加しているためか、J T A公式試合において「回し蹴りばかり蹴る選手」が目立つようになってきている。これをそのままにしておくと、いったいぜんたい何の組手試合なのかがわからなくなる。率直なところ、「回し蹴りだけの選手」はJ T Aには不要である。なぜならば、回し蹴りは蹴美ではないからである。

また、周知の通り、J T A公式試合は、無差別級の場合、最大30 k gの差がある。たとえば、ボクシングは3 k g未満の差異で細かく階級分けをしており、プロのキックボクシング・ジムでは、別の階級の選手とスパーリングを行うことはない。つまりJ T Aの無差別級の組手試合は、体重の軽い選手にとっては、テコンドー界で最も過酷な試合なのだ。

それに加えて、体重の重い者が、ルール上、顔面強打がないことを奇貨とし（顔面強打があると不可能）何の技も出さずに間合いをつめて圧力をかけ、中段回し蹴りばかり蹴るとすれば、体重の軽い選手はたとえ完璧に防御したとしてもスタミナ・ロスは尋常ではなく、結果として蹴美力ではなく、体重差とルールの悪用で負けてしまうのだ。

とりわけ全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会（全日本F T大会）は、後樂園ホールのリング内で実施されるためフットワークによるかわし防御に限界があり、体重が重いというだけで勝ってしまう危険性が高い。

全日本F T大会は、蹴美に秀でた選手が出場すべきであり、入賞すべきであり、優勝すべきなのだ。

蹴美を極めるということは、JTAの技術的生命線であり、断じて譲ることのできない流派ポリシーである。そしてそれは、JTA公式戦において実証されなければならないのだ。そこで非蹴美的蹴り技を禁止するものとする。

## 記

### 第1条 中段回し蹴りの禁止

- 1, JTAの全公式戦の全階級においては、中段回し蹴りの禁止する。  
JTAフルコンタクト・ルール、JTAライト・コンタクト・ルール、少年少女部等特別ルール等にかかわらず全面的に禁止する。
- 2, JTA公式試合中、中段回し蹴りを蹴った場合、故意・過失に拘わらず、減点1とする（減点2で失格）。  
審判は、蹴美優勢勝ち、技あり、有効等がない場合、必ず中段回し蹴りを蹴った選手の減点1を重く見て敗者としなければならない。

### 3, 例外

次の場合は、主審が判断し、減点しない。

- 1) 相手側が飛び蹴り等で跳躍したり、あるいは体勢が崩れて倒れそうになり、はなった上段回し蹴りが結果として中段回し蹴りになった場合は減点をとらない。
- 2) 体勢が崩れてはなった軽い蹴りが結果として中段回し蹴りになった場合は減点をとらない。  
ただし、加減が認められない重い蹴りは、いかなる場合であっても例外扱いはしない。
- 3) 両選手が同じタイミングで飛び蹴りを行い、結果として中段回し蹴りになった場合は減点をとらない。

## 第2条 下段回し蹴り（ローキック）の即時失格

- 1, J T Aの全公式戦の全階級においては、  
故意・過失にかかわらず下段回し蹴りを蹴った場合は、即時失格処分とする。

### 主旨

もともとJ T Aに限らずテコンドー各流派は下段回し蹴りを反則技として禁止している。しかし、主としてフルコンタクト系空手経験者が蹴る場合が稀にあり、減点や注意で済んでいることがある。下段回し蹴りは馴れていないと蹴られた足のダメージが大きく、蹴れなくなり、戦意が落ちてしまう。結果、負けてしまう試合があった。これも公正ではない。

- 2, 上記裁定につき不服・不遜な態度をとった者は、J T A公式戦永久出場禁止処分とする。
- 3, 下段回し蹴りに例外は認めない。弁明の機会を与えず即時失格とする。

本法は、2013年8月よりJ T A全公式試合において施行する。